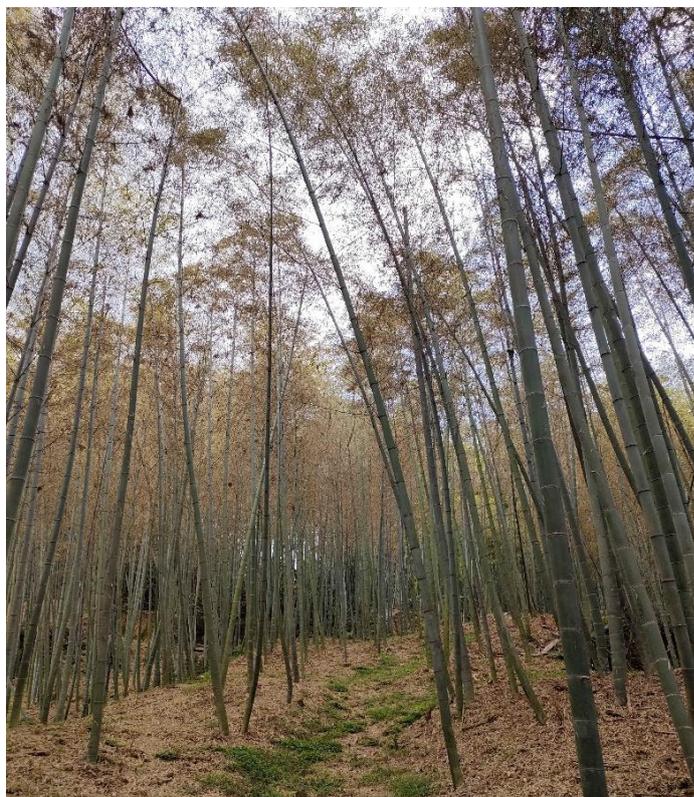


営農ウィークリーNEWS

竹の葉食害被害で国など現地視察に入る

本紙718号で紹介しました竹の葉を食害する害虫の異常発生は、8月15日の日本農業新聞、8月22日の京都新聞でも取り上げられました。被害は、当JAの管内のみならず、広域に見られることから、京都府はもとより国の機関でも注視され、9月5日、林野庁、農林水産省、近畿農政局、京都府の農産課、森の保全推進課、農林水産技術センター、農業改良普及センター、京都市、長岡京市、向日市、JAの職員17名で、被害圃場の視察が行われました。意見交換会では、害虫の特定や防除対策などについての課題があり、今後、さらに検討を進めていくこととなっております。



害虫の食害で青い葉のなくなった竹藪



現地視察の様子



竹藪で見られた幼虫

—TAC information—

今年も出穂早まり刈取り適期も早まる



6/7 植えのヒノヒカリ (8/30 時点)

本年は高温の影響により、早生の水稻品種では出穂が平年に比べて1週間程度早くなり、刈り取り適期も早まっています。現在ヒノヒカリ、にこまるなど中晩生品種が登熟に向かっています。ヒノヒカリの収穫時期は出穂後の積算温度が1000~1050℃、にこまるはそれより多くなります。8月20日出穂のヒノヒカリでは、9月8日時点で積算温度が約550℃程度で、今後平年並みの気温で推移すると仮定した場合、1050℃になるのは9月28日頃となります。水田をよく観察して刈り遅れないよう注意してください。

キュウリ黄化えそ病の注意喚起がされました

発生予察特殊報第4号より抜粋

病害虫名 キュウリ黄化えそ病

病原ウイルス名:melon yellow spot virus:MYSV

作物名 キュウリ

発生地域 京都府南部

1 発生経過

令和6年6月、京都府南部の露地キュウリほ場において、葉に黄化症状を示す株が認められた(写真1)。京都府生物資源研究センターにおいてRT-PCR 法による検定及びRT-PCRの増幅産物の塩基配列解析から、melon yellow spot virus:MYSV の感染を確認した。本ウイルスの発生は国内では1992年に静岡県の実で確認された以後、全国的に確認されている。なお、同試料からウリ類退緑黄化ウイルス(cucurbit chlorotic yellows virus:CCYV)の感染も確認している。

2 病徴

本病の病徴は、発生初期には、生長点付近の展開葉に葉脈の透過を生じ、後に展開葉においてモザイク、えそ斑点、黄化等の症状が生じる(写真2)。果実では、表面にモザイク斑紋や奇形が生じることがある。さらに症状が進展すると株全体に黄化が進んで草勢が低下し、育苗期に発病した場合は最大で30%減収するとされている。

3 病原ウイルスの特徴

(1)病原はオルトスポ属のウイルスで、ミナミキイロアザミウマにより媒介される。他のアザミウマ類の媒介については不明である。

(2)ウイルスに感染した植物を吸汁したミナミキイロアザミウマの幼虫はウイルス媒介能を永続的に保持する。しかし、成虫になってから感染株を吸汁しても媒介能は持たない。なお、経卵、種子及び土壌伝染はしないとされ、また、汁液伝染での感染力は低いため管理作業で伝染する可能性は低いとされている。

(3)本ウイルスは、キュウリ、メロンおよびスイカ等のウリ科で自然感染し、雑草ではナズナ、ミミナグサ、カタバミ、ハコベ、ホトケノザ等で保毒を確認した報告がある等、広範囲な植物に感染することが確認されている。

4 防除対策

(1)発病株は直ちに抜き取り、ポリ袋等に密閉してほ場外に持ち出し適切に処分する。

(2)媒介虫であるミナミキイロアザミウマに対する以下の防除を徹底する。

- ①苗に寄生していない事を確認して、ほ場に定植する。
- ②施設の開口部に0.4mm 目以下の防虫ネットを展張し、侵入を防ぐ。
- ③近紫外線カットフィルムを使用する。
- ④施設では、青色ないしは黄色粘着ロールや粘着板を活用する。
- ⑤施設内及び周辺の雑草は発生源となるので、徹底して除去する。
- ⑥周辺に分散させないため、栽培終了後に全株を地際から切断または抜根し、施設を密閉して死滅させる。
- ⑦薬剤感受性低下を防ぐため、同一グループの薬剤の連用を避ける。



写真1 黄化症状

(CCYV との混合感染株)